

ウイルス母子感染防止に関する調査研究

- C 型肝炎ウイルス母子感染の現状 -

- 特に IFN 治療効果について -

分担研究者 白木和夫 鳥取大学小児科
研究協力者 森島恒雄、杵山正浩、木村宏、糸州朝久
名古屋大学医学部保健学科、同小児科

要約：C 型肝炎ウイルス(HCV)の母子感染の頻度について調査を行った。同時に母子感染のリスクファクター検討した。

1.愛知県下における HCV 母子感染の現状

対象と方法：1995 年より愛知県下の名古屋大学関連施設(20 病院)において HCV 抗体陽性かつ HCV RNA 陽性の妊婦より産まれた児について prospective に HCV 抗体の消長、HCV RNA、肝機能値の推移を調べた。児の follow up 期間は 2 年以上とした。

結果：

1.HCV 抗体陽性かつ HCV RNA 陽性の妊婦の出産は 240 例であった。

2.児への感染（HCV RNA 陽性、HCV 抗体再上昇を示した症例）は計 21 例であった。

3.その中で 2 歳以降も HCV RNA が持続陽性であった症例（持続感染例）は 13 例であった。

4.一過性感染例（HCV RNA が 2 歳までに陰性化し、HCV 抗体の陰性化または低下を認めた症例）は 8 例であった。

5.以上から、HCV の母子感染率は 8.8% 持続感染率 5.4% 一過性感染率 3.4%と推定された。

6.一過性感染例では全ての症例が 1 歳までに HCV RNA が陰性化し肝機能も正常値が持続している。

表 1 母子感染の発生頻度（愛知県）

(1) HCV 抗体陽性、HCV RNA 陽性妊婦 (児への follow up 期間、2 年以上)	240 例
(2) 児への感染率 (RNA 陽性、HCV 抗体再上昇)	
持続性感染例 (2 歳以降も RNA+)	13 例 (5.4%)
一過性感染例 (2 歳以降、RNA-、抗体陰性化または低下)	8 例 (3.4%)
	21 例 (感染率：13/240=5.4%)

2.HCV 母子垂直感染児に対するインターフェロン 治療効果

対象と方法：母子感染がウイルス学的に明らか小児 (*~*歳) に対してインターフェロンの皮下注射による治療効果を検討した。方法はインターフェロン 10mg/kg/回を最初の 2 週間は連日投与し、それ以降の 22 週間は週 3 回の投

与とした。投与開始 12 週の時点で、血液中の HCV RNA の陽性が続き、ウイルス量の低下傾向が認められない症例は無効と判定し以後のインターフェロン投与を中止した。

治療効果判定：

有効例- 治療終了後 1 年以上 HCV RNA 陰性および肝機能正常化が続く症例

無効例- 上記にあてはまらない症例

結果：

IFN 治療対象例*：

有効例 10 例 (71%)

無効例 4 例 (29%)

*2 例を除き 2-3 歳時に治療

インターフェロンの副作用：

1 歳児に治療した 2 例中 1 例に熱性痙攣を認め
た。2 歳以上に治療した症例では特記すべき副
作用を認めなかった。

(参考資料)

HCV 母子感染がなくまた、免疫不全 (臓器移植

や血液悪性腫瘍化学療法を受けた症例) がない
症例、主に open heart surgery の輸血で感染した
症例が中心

有効例 17 例 53%

無効例 15 例 47%

結論：以上の検討から HCV の母子感染は 8.6%
であり、持続感染は 5.4% に認められた。これ
らの母子感染例に対してインターフェロン に
より治療を行ったところ 71% と非常に良好な
結果を得た。ただし、1 歳前後では副作用とし
て熱性痙攣を認める症例もあった。以上から母
子感染例に対して 3 歳前後でインターフェロン
による治療を検討してもよきと思われた。